



少年育成センターだより

令和2年12月10日

第23号

坂出市少年育成センター
坂出市久米町1-18-20

TEL 46-2777

FAX 46-7140

新しい生活様式の中で育まれた心

坂出市少年育成センター 所長 三野 勝

平素より、青少年の非行防止や健全育成活動及び少年育成センターに対するご理解と、ご協力をいただいております。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、学校の休校、自粛生活が続き、緊急事態宣言解除後も、マスクの着用、三密（密閉・密接・密集）の回避など「新しい生活様式」が求められました。そのような中、学校現場では密は避けても心のつながる教育活動が工夫され、展開されてきました。

また、先の見えない不安な状況の中ではありましたが、立ち止まり考えさせられたことも多かったのではないのでしょうか。今まで当たり前だった日常が決して当たり前ではないことに気付く中で、多くの人々が互いに支え合っ

て生活していることにも改めて気付けたのではないのでしょうか。育成センターの補導やパトロールの際、さわやかな挨拶をしてくれる子どもたち、「友達と一緒にやっばり楽しいです。」「部活ができるのはうれしいです。」と意欲的に話してくれる生徒たちに出会うことができました。また、朝の通学路では、交通安全を呼びかける中学生の姿も見ることができました。新しい生活様式で戸惑いや不便を感じながらも、前向きに頑張る子どもたち、日常の生活を大事にしようとする生徒たちの姿に元気をもらうことができました。

した。ただ社会の環境は、いじめや児童虐待、スマートフォン（SNS）利用に起因するトラブルや事件、ネット依存やゲーム依存等、子どもたちの成長に悪影響を及ぼす様々な状況が懸念される場所があります。加えて地域を不安に追い込む不審者情報も後を絶ちません。

育成センターでは、7つの活動（補導活動、地域安全パトロール、環境浄化活動、相談・支援活動、広報・啓発活動、地域育成活動、関係機関との連携活動）の取り組みを通して、子どもたちの安全安心な環境づくりと健全育成を地域や関係機関とともに支えています。

最後になりましたが、今回の作品募集におきまして、夏休みが短縮された中ではありましたが、たくさんの応募をいただきました。学校で健全育成への呼びかけをしてくださった先生方、熱心に作品作りに取り組んでくれた児童・生徒の皆さんに感謝したいと思います。今回寄せられた537点の健全育成のポスターや標語・作文は、どれも感性の鋭い豊かな心の表れたものばかりでした。そのうちの優秀作品を掲載しましたので、ご覧頂ければと思います。今後とも、将来の坂出市を担う青少年の成長を温かく見守っていただきませう、よろしくお願い申し上げます。



優秀作品の展示

R2.11.16~11.20
中学校・高校の部

R2.11.9~11.13
小学校の部

坂出市役所 市民ロビー



	ポスター			標語			作文			合計
	応募	特選	入選	応募	特選	入選	応募	特選	入選	
小学校	101	5	22	179	6	20	62	3	11	342
中学校	18	2	5	102	4	11	30	3	4	150
高校	18	1	5	27	1	4	0	0	0	45
合計	137	8	32	308	11	35	92	6	15	537

応募総数・入賞者数

青少年の健全育成作文・特選作品

「ああ、ゲームオーバー」

東部小三年 水川 高太

「やばい。宿題ができてない。」
昨年の夏休み、ぼくはオンラインゲームにはまってしまい、やめられなくなってしまう。ボイスチャットで友だちと会話しながら、きょう力して、てきをたおしていくのがおもしろい。「今日は、何時からプレイしよう。」と、友だちとやくそくしているから、うずうずします。時間がすぎても、チームプレイなので、と中ではなかなかやめられません。

「ゲームは、一日三時間まで」と、家できめたルールをやぶって、朝からばんまでゲームさんまの夏休みでした。お母さんが、「ゲームをやめて、宿題をしないさい。」と言うけれど、聞かずにやりつづけてました。「宿題しろ。ゲームを消せ。ゲームを山にするぞ。」と、いつもはやさしいお父さんまでもが、かんかんにおこってしまいました。ぼくは、まずいと思いがらもふとんの中で、こっそりゲームをつづけました。ぼくは、ゲームいぞんしょうになりかけていました。
夏休みの宿題ができないまま、始ぎよう式をむかえました。「宿題ができてないから、先生におこられる。学校を休む。」とお母さんに言ったけど、「自分が悪

いの中から、おこられてきなさい。おかれても学校にぜったい行きなさい。」と言われて、泣きながら学校へ行きました。

やはり先生におこられたけど、ぼくのことを心配してくれ、す直に反せいしました。「今なら、まだ間に合う。今日から、気持ちを切りかえて生活リズムをもどそうやりのこした宿題は、今日からしたらいい。」と、やさしく、きびしく言われました。

ぼくは、二学期が始まってから、夏休みの宿題を仕上げました。ゲームをする時間もなくなり、前の生活リズムがもどってきました。今、考えてみると、家族をこまらせ、めいわくをかけ、いやな思いをさせてまで、ゲームをしつづけたぼくは、病気だったのかもしれない。だって、あの時のぼくは、「やめろ」と言われるとイライラし、弟や妹にまで当たってました。食事やねる時こくもふきそくで、生活リズムがくるっていました。ゲームをつづけるために、うそをつき、やくそくをやぶりました。本当に、自分勝手でわがままな、悪い自分でした。

今でもゲームはすきです。やり始めると、やめられなくなり。だからこそ、ゲームオーバーにならないように、けじめをつけることが大切だと思います。



家に帰ると気がゆるむので、できるだけ早目に宿題などをすませ、やるべきことが終わらないと、ゲームはしないことにしました。一年前の夏休みのような生活には、もどりがありません。そのために、ゲームをする時のルールをきちんと守りたいです。

青少年の健全育成作文・特選作品

「朝のあいさつ」

附属坂出小三年 篠岡 秀一

ぼくはいつも電車で通学しています。朝、駅に行くと、あいさつをしてくれるおじさんがいます。おじさんはボランティアであついても、さむい日も、雨の日も、一年中ずつとぼくたちを見守ってくれてます。たとえば、ぼくたちが道路をわたる時に、車を止めてくれたり、駅に止めてある自てん車をせい理したりしてくれてます。おかげでぼくたちは安全にとう校できています。

おじさんのあいさつは、元気で大きな声です。いつも笑顔で、「おはよう。いってらっしゃい。」と声をかけてくれます。ぼくはおじさんからあいさつをされるとうれしい気持ちになります。そしてその声から元気をもらっています。ぼくも本当は大きくて元気な声であいさつしたいと思っています。だけど、少しはづかしかったり、つかれたりして、小さい声でしかあいさつを返せていません。

ぼくがなせいにじめについて考えたのかというと、先日、自分が学級委員に立候補したことがきっかけです。その時、学級のみんなに「みんなが仲良くできるクラスを作る」と宣言しました。これは言いかえると、「いじめを起こさない学級」です。どこにでもいじめ



青少年の健全育成作文・特選作品

「いじめ」

加茂小六年 瀧本 一就

いじめを起こさない学級」です。どこにでもいじめ

の芽はひそんでいます。少しの悪意があれば、誰でも相手を傷つけることができます。みんなが仲良くするために、いじめの芽を見逃さないことが大切だと考えました。

これまでに自分の学級でも、これはいじめかなと思う場面を見たことがあります。一対一で始まったのもめ事がいつの間にか、一対集団の構図になっていました。友だち同士でもめたとき、誰か味方をして欲しいという気持ちばかりですが、数が多い方が正しいと成ってしまい、一人の方が間違っているという雰囲気になるのは嫌いです。自分が仲良くできる学級を目指すその裏で、一人で悲しい思いをしている人がいるのは嫌です。そして、そんな場面を見たときに、まわりの人が、「どしたん。」と一言、声をかけることができれば、いじめを受けている人は、「一人じゃない。」と大きな勇気をもたらすはずで。

いじめは日本中、いや世界中でも起きていますが、大きな事件となるまでまわりに伝えられることなく過ぎ去っていきます。最近、ネット上の誹謗中傷が原因で自らの命を絶つという悲しいニュースがありました。大人でさえ誰にも言えない悩みを抱えているのだから、子どもだともつと言えないのかもしれない。ほくは、このような悲しい出来事が起こる前に相談しやすい雰囲気を作れないかな

あと考えました。

自分たちの学級に目を向けて考えてみると、ほくらの学級では、自分たちでお楽しみ会やクイズ大会を自由に企画し、実行してよいことになっていきます。ほくは、学級委員として学級のみんなが楽しくなるような遊びの計画をたくさん考えようと思います。遊びを通して、一人ひとりがどんどんつながっていくことで、悩みや不安を言いやすい雰囲気や関係ができていくのではないかと思います。そうすることで、みんなが仲良くなる場を作りながら、いじめの芽を減らすことができると考えています。「いじめを起さない学級」に向けて、まずは、仲間づくりの活動を企画する予定ですので、学級の皆さん、楽しみにしていってください。



青少年の健全育成作文・特選作品

「自主的な行動」

坂出中一年 森口 斗真

僕は学校へ自転車で行く時、いつも歩道のごみを拾うおじさんを見かけます。雨の日でもカップを着て毎日欠かさずごみを拾っています。その姿を見て、僕はどうしてごみ拾いなど自主的に行っているのかと疑問をいだき始めました。そんな時、天気予報では、午後

から雨だったので、部活動のバッグや水とうを入れてあるカゴに無理やりカップをつめ込んでいました。しかし坂を上る時にそのカップを落としてしまいました。周りには自転車が行っているのに、無理に坂を下って取りに行くことができませんでした。そこにいつもごみ拾いをしているおじさんがわざわざ走って取りに行ってくれました。そして感謝を伝えると、「あたり前のことだよ。」と言って再びごみ拾いを始めていました。

そこで僕は自分の生活について改めて思い返してみようと思い、家に帰って小学生の時やっていたボランティア活動について考えてみることにしました。小学生の時に二回ボランティア活動を朝に行っていました。あいさつをするボランティアと学校を清掃するボランティアをしていました。僕は正直めんどくさいな、やりたくないなと時々思うことがありました。ボランティアは人のため、みんなのためにすることは知っていましたが、自主的にしようとはしていませんでした。

しかし、あのおじさんに会って何のために、どんな理由で自主的にやっているのか分かった気がします。小学校の時先生が「人から言われなくても自主的にしよう。」と呼びかけていたことの意味も分かりました。ボランティアは言われないところから自分からしたときにはならないし、達成感も感じ

ません。だけど自分でしようと思うことによってやりがいも感じるし、新しい発見もあるかもしれません。自分のためではなく、みんなのためにボランティアをすることも大切だと思います。そしてそれ以前に自主的にすることが一番大切だと自分は感じました。小学校の時のためにこのボランティア活動をしていたのか分かりました。

きっとあのおじさんもみんなのために自主的に毎日続けているんだと思います。僕もボランティアをする時はいいやするのでなく自分からしたいと思えます。そしてボランティアだけでなく他のこともまず、自分からやっていきたいです。

青少年の健全育成作文・特選作品

「親切に触れて」

東部中二年 小山 紗世

私の祖父母は遠くに住んでいます。今年はこのコロナ禍で、なかなか会いに行く事が出来ません。最近よく電話で会話をするので、毎回祖父母が近所の人達に親切にしているという話を聞きます。例えば、声を掛けて様子を見てくれたり、おかずのおすそわけに来てくれたりするので、私は、それを聞いて、とても素敵な事だと思いました。こうやって大変な時は助け合って生きていくことは、とても大切な

と感じました。

私は、祖父母と離れていて、何もしてあげられないけれど、私でも出来る事はないだろうかと思えました。そこで思いついたのが二人に似合うマスクを作ったあげることでした。どんな柄がいいだろうな、どんな生地を使ったらつけごちが良さそうかと考えながら一生懸命作りました。喜んでくれるかな、と少し不安だったけれど、無事に祖父母にマスクが届いたとき、二人から「ありがとう、とてもうれしかったよ。これから大切に使用してもらおうよ。」と電話が来て私はとてもうれしい気持ちになりました。コロナであまり出かける事が出来ない祖父母も少しは元気になってくれたようで、なんだか心が温かくなりました。

私もご近所の方達から親切を受けたことがたくさんあります。私が小学生のころの下校中の出来事です。荷物が重くてこけてしまったて泣いていると、近所の方が「大丈夫？」と声をかけてくれて、手当てをしてくれました。痛くてもう帰れないかもしれないとその時は思っていたけれど、その一言で元気が出て、無事に帰る事が出来ました。他にもご近所の方が自分の畑で作った野菜を持って来てくれることがあります。「これ食べて頑張ってみてね。」と言って下さるのでとてもありがたい事だと思えました。町内会の太こ台に参加した時には、分からない事だらけでど

うすればいいのだろうと困っていると、丁寧に分かりやすく教えてくださって、楽しく太こ台に参加することが出来ました。私の知らない太こ台の歴史についても教えていただけで、とても勉強になりました。

このように振り返ってみると、たくさんの方々の支えがあるからこそ生活していけるのだと改めて感じました。自分が親切をされると、うれしく温かい気持ちになります。もしも困っている人がいたら、自分がしてもらったように自分も手をさしのべられる人になりたいと感じました。また、ありがたうという言葉の気持ちをしつかりと言葉に出せるような人になりたいと思いました。

これからも、私は、家族やご近所の方達と互いに助け合ってきたいと思います。そして、地域の温かい絆をこれからも大切にしていきたいです。

青少年の健全育成作文・特選作品

「地域の絆」

東部中二年 原岡 翔瑛

悲しい事件のニュースを見ていて思うことがある。なぜこんなことが起こるのだろうか。なぜ犯人はこんなことをしてしまったのだろうか。事件の少ない町に住んでいる僕には想像できない。

都会は地方と比べて、事件の数が多し。そこで、都会と僕の住ん

でいる町の違いについて考えてみた。都会は、人口が多く、ほとんどの人がマンションに住んでおり、隣の人の事をあまり知らない。お互い声を掛けづらいため、ご近所トラブルが発展しやすい。一方、僕の住んでいる町では、人口が少なく、多くの人が、一軒家に住んでいる。そこに定住する確率が高く、自治会に入ることによって、近所の人の事を知ることができる。クリーン作戦やお祭り等の地域行事に参加することで、顔見知りになれる。

僕の家の周りは、同じ時期に家を建てて引っ越ししてきた人達が多い。お互い分からない事を聞いたり、教えたりして交流がある。例えば、登校中によく近所の人があいさつをしてくれる。ある日、隣の人があいさつをしてくれたのに、僕は眠いせいかわかり、急いでいたせいか、そっけなく返事をしてしまったことがあった。学校から帰ってくると、母が言った。「お帰り。元気なん?」「うん。なんで?」

「元気なんやったらええよ。隣の人が、朝あいさつの時に声が小さかったけん、どっか調子が悪いんか?と心配しとったで。」

僕は、ドキッとした。何気ない返事で、まさか隣の人に心配をかけてしまうとは。申し訳ないなと思うと同時に、自分を見守ってくれていてありがたうという感謝の気持ちでいっぱいになった。これ

からは、できるだけ自分から大きな声であいさつをしようと思った。また、僕の母は家の前で近所の人と井戸端会議をよく開く。皆で何気ない話をして笑っている。時々、にぎやか過ぎてうるさいなと思うこともある。ある日の晩、水やりをしていた母が、斜め前の家の庭から出てきた不審者と鉢合わせしたことがあった。僕は、平和な町から治安が悪い町になったと、急に怖くなった。翌日、また井戸端会議が開かれ、話題は不審者の現れた時間帯、特徴、犯行目的についてだった。警察にも相談して、受けたアドバイスを皆に話した。皆は自分の事のように真剣に話を聞いて、対策を考えた。防犯カメラの設置や決まった時間に家の二階から通りをのぞく等。情報を共有することで、防犯意識や防災意識の向上につながる。この一件で僕は井戸端会議の重要性に気付いた。

これらの体験を通して気付いたことは、あいさつをして、顔見知りになり、交流することで、地域の輪が広がり、絆が生まれるということである。地域全体が大きな家族のように一つにまとまることができれば、安心・安全な町になると思った。

